

## 分科会 4

### 読み聞かせ講座

#### 「よむ！くむ！たのしむ！」

子ども読書活動交流集会（実技編）

講師：大井 むつみ（東京家政大学）

この講座では、まず、「よむ！」どう読んでいいのかわからない絵本、読んでもらったことがない絵本をきいてみる。それから「くむ！」たとえば、こういう絵本の組み合わせはいかがですか、という2つのプログラムを提案した。最後に「たのしむ！」話題の絵本、写真絵本、最近の絵本を読んで読み聞かせの楽しさを実感する。そして、図書館と子どもの読書を考える機会とした。以下、読み聞かせをした絵本と講義の内容を記録する。



#### 第1部 よむ！ ＊リズム感のある絵本

- カニツンツン（金関寿夫／ぶん 元永定正／え 福音館書店 読み手：講師）
- かえるだんなのけっこんしき（ジョン・ラングスタッフ／再話 フォードル・ロジャンコフスキー／絵 光村教育図書 読み手：県立図書館職員）
- あたごの浦（脇和子／再話 脇明子／再話 福音館書店 読み手：鴻巣よみきかせの会）
- つきよのおんがくかい（山下洋輔／文 柚木沙弥郎／絵 福音館書店 読み手：講師）
- ・いきの良い言葉は聞くだけで心が弾む。心

地よい言葉は真似したくなる。

- ・楽しく心弾む言葉を子どもたちがたっぷり聞いているか。子どもたちの周りにどれくらいあるか。育っていく間に、どういう言葉に出会っているか。読み聞かせをする人も同じ。
- ・絵本がどう読まれたがっているかをキャッチする。
- ・読み聞かせする本人が、子どもに読む前に、絵本は楽しいものだとしてたっぷり味わうことが必要である。

#### 第2部 くむ！ ＊和風・洋風のプログラム

- ねぎぼうずのあさたろう その1（飯野和好／作 福音館書店 読み手：ポランティア）
- だるまさんが（かがくいひろし／さく ブロンズ新社 読み手：県立図書館職員）
- てんきよほうかぞえうた（岸田衿子／作 柚木沙弥郎／絵 福音館書店 読み手：そよかぜ文庫）
- 詩「古い家」（『詩集孔雀のパイ』ウォルター・ラ・マア／詩 エドワード・ア・デ・イニ／絵 間崎ルリ子／訳 瑞雲舎 朗読：そよかぜ文庫）
- くらーいくらいおはなし（ルス・ブラウン／作・絵 深町真理子／訳 佑学社 読み手：講師）
- 詩「だれか」（『詩集孔雀のパイ』同上 朗読：そよかぜ文庫）
- 魔女ひとり（ローラ・ルーク／作 S. D. シンドラー／絵 金原端人／訳 小峰書店 読み手：鴻巣よみきかせの会）
- ・「くらーいくらいおはなし」最後の場面が印象に残る。ゆっくり低い声で読んでほしい。
- ・日本語と翻訳の文体で言葉のリズムが違うことに注意。それぞれのリズムを味わい、楽しみ、届ける。
- ・「この本よかったわよ」という表現に注意。「うけた」の言葉でくくらない。「うける」という言い方には聞き手に対する敬意が感じら

れない。



### 第3部 たのしむ！

#### <韓国の絵本>

●ふしぎなしろねずみ (チャン チョルムン / 文 ユン ミスク / 絵 岩波書店 読み手: ボランティア)

- ・雨の美しさと発想の面白さに注目。
- ・プログラムで迷ったら昔話がよい。年齢を問わず、読み手を選ばない。

#### <生誕百年 赤羽末吉の絵本>

・子どもにわかってもらわなくてももしっかりとした本物を見せるのが大切である。分からないだろうとかってな思い込みは子どもに迷惑である。(赤羽末吉の言葉)

●かさじぞう (瀬田貞二 / 再話 赤羽末吉 / 画 福音館書店) 抑えた色調と格調高い言葉で日本の美しさが見事に表現されている。

#### <写真絵本>

絵とは違うリアリズム。子どもはリアリズムが目の前に差し出されることを歓迎する。

●ぼくのおじいちゃんのかお (天野祐吉 / 文 沼田早苗 / 写真 福音館書店 読み手: 講師)

#### <最近の絵本の紹介>

●ぶたにく (大西暢夫 / 写真・文 幻冬舎エデュケーション 2010.1刊)

・この作品の写真はリアルで生々しいが、いい意味でドライである。気持ちが重たくなならない。子どもに対する誠意と共に「食」に対する敬意を感じる作品。

●ぼくのブック・ウーマン (ハザー・ハッソ / 文

デビッド・スモール / 絵 さ・え・ら書房 2010.4刊)

「最初にあとがきを読むことは、絵本のけっしてよい読み方ではありません。けれど、特別な例外もあります。」(小さな本の大きな世界 長田弘 東京新聞 2010.10.18.p10 より)

・見返しの文章に目をとめてほしい。

●トマスと図書館のおねえさん (パット・モーラ / ぶん らう・コーン / え さ・え・ら書房 2010.2刊)

・この絵本にでてくるような図書館員が欲しい。図書館で大切なのは、そこにいる「人」である。

・学校図書館がどうなっているか知っているか。学校の教科で図書館を必要としないものはひとつもない。司書がいて、いつも開いているか。十分な本があるか。読み聞かせに学校へ行っているのに、学校図書館を知らない人は多い。

・子どもは本の中で知らない人とたくさん出会うことができる。本は安全な冒険の手段である。閉じれば終わるのだから、存分に楽しんでほしい。

・重いテーマは絵本という表現形態にするのは無理がある。読み聞かせでは本の世界は楽しいと伝えることにまず力を入れてほしい。

#### 質疑応答

Q 私は初心者なのですが何か極意はあるか？

A 好きな絵本を選ぶこと。読み継がれている作品をかたはしから読むこと。子どもを知ること。ただ、「この手のものは苦手」と、自分で決めない。レポートリーは広い方がよい。自分の読み聞かせを聞いてもらい、冷静な判断をしてくれる仲間も必要である。

Q 声の出し方は？

A 子どもたちのさらに後ろの方に届けようという気持ちで声を出す。そのイメージを持つだけで違ってくる。

分科会担当者：坂本雅子 (そよかぜ文庫)、園部恵津子 (鴻巣よみきかせの会)、ボランティア：安藤允浩 (絵本の会とまと代表)